

サル痘流行 「ワンヘルス」認識深め !!

朝日新聞・朝刊

令和4年6月11日（土）の朝日新聞・社説に「サル痘」に関連して「福岡県のワンヘルスの取組」が掲載されましたので、紹介します。

アフリカの一部地域で流行していたサル痘が欧米に広がり、世界保健機関（WHO）が警戒監視の強化を呼びかけている。

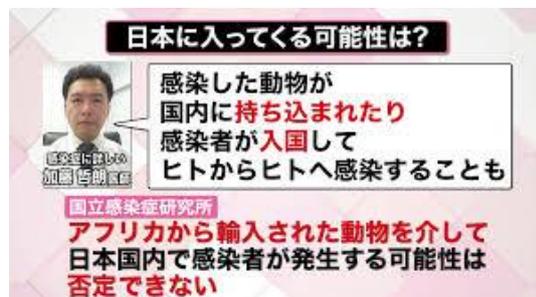
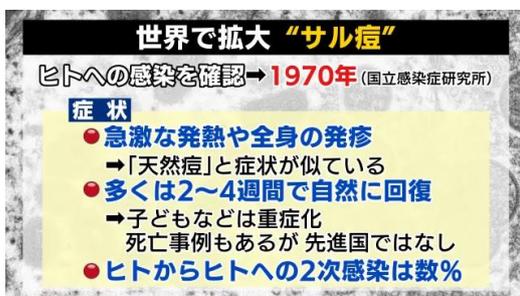
もともとは野生のリスやネズミがサル痘ウイルスの宿主だと考えられている。人にも動物にも感染する点では、新型コロナや新型インフルエンザ、エボラ出血熱などと同じで、いわゆる「人獣共通感染症」だ。

人間と動物の健康、自然環境の健全は互いにに関わり合っており、これをひとつの問題としてとらえる「ワンヘルス」の考え方が広がっている。昨年のG7サミットでも、ワンヘルスへのアプローチ強化が成果文書に盛り込まれた。

条例を制定してワンヘルスに関する施策を展開する福岡県では、ペットや野生動物を対象に、マダニを介して感染する重症熱性血小板減少症候群（SFTS）などの調査に乗り出している。先駆的な取り組みだが、本来は国が音頭をとって全国レベルでやるのが望ましい。

人口減少や過疎化に伴って野生動物の生息域が拡大し、一方で都会にすみ着く外来種もいる。私たちの健康は、身近な動物や地域の生態系を抜きにして考えられないという理解を、一人ひとりが深めていきたい。

（一部抜粋）



【サル痘】

サル痘とは、サル痘**ウイルス** (Monkeypox virus) に感染することから発症する病気です。類似した疾患である**天然痘**と比較すると軽症ですが、ときに重症化して亡くなることもあります。また、バイオテロリズムに使用されることが懸念されています。

サル痘ウイルスは、サルや人には偶然、感染すると考えられ、げっ歯類などのネズミが主な感染動物と疑われています。感染した動物に噛まれたり、血液などの体液に触れたりすることで人に感染が成立します。アフリカを中心として流行することが多い病気ですが、過去にはペットとして輸入された動物を介しての発生例がアメリカでありました。

日本においては4類感染症に指定されて以後2015年までの間に発生の報告例はありませんが、同様の感染経路から発症することも懸念されます。また2017年9月にはナイジェリアにおいて、疑い症例を含めて200名以上の発症報告があり注意喚起がなされています。

承認されたサル痘に特異的な治療方法はなく対症療法が中心となります。原因となる動物に接触しないこと、感染経路や流行地についての情報に留意することが感染予防につながります。

サル痘とは、サル痘**ウイルス** (Monkeypox virus) に感染することを原因として発症します。サル痘ウイルスはラット、リス、サル、チンパンジーなどに感染し、感染した動物に噛まれたり、体液などに直接触れたりすることで人に対する感染が成立します。類似した症状を呈する**天然痘**と比較すると人から人への感染率は低いです。

ただし、人から人への感染がまったくないというわけではなく、体液や皮膚病変などへの接触により感染が広がることもあるため注意が必要です。

天然痘は**ワクチン**によって撲滅された疾患です。このワクチンがサル痘ウイルスに対しても予防効果があったため、撲滅されたために天然痘ワクチンを接種しなくなった現在、サル痘の流行が危惧されています。

2022年6月13日

福岡ワンヘルス協議会・事務局